

森林体験活動時における知的障がい者のコミュニケーションの特徴

ー参加者のコミュニケーションの類型化から考えるー

佐藤孝弘

はじめに

森林体験活動を進める際に指導者は、活動目的、内容、課題、課題解決のための手段等を参加者に伝え、これを理解してもらうことが大切です。このため、指導者には森林に関する豊かなコミュニケーション能力が求められます。しかし、知的障がい者（以下、利用者と呼びます）は他者とのコミュニケーション能力に課題を抱えている人たちが多く、利用者の前に立つ指導者はこうした状況を理解し、受容的態度を持って接していくことが重要です。

本稿では、筆者が取り組んだ利用者との森林体験活動（以下、活動と呼びます）の実践記録からコミュニケーションの様子を抽出し、その特徴を検討します。

利用者のコミュニケーションに係る課題

コミュニケーションとは、送り手から受け手への情報伝達やそれにより生じた心のふれあいや共通理解を意味します。コミュニケーションの手段としては、「言葉による方法」と「言葉によらない方法」の2つがあり、前者を「言語的コミュニケーション」、後者を「非言語的コミュニケーション」といいます。

一般に、利用者は言葉の発達が遅く、他者との言語的コミュニケーションを円滑に図ることに困難を抱えることが多いとされています。特に、言語の意味は理解できるが、言語を発する能力に遅れがみられることが特徴です。

調査の概要

（1）対象とした活動

分析対象としたのは筆者が知的障がい者施設で実施した森林散策3事例です（事例A～C）。以下に各活動の概要を示します。

各活動とも施設が所有する森林内で実施し、活動の内容は、利用者と職員が森林を散策しながら、道々に見られる森林の事物について話し合ったり、季節に因んだものに触れたりする内容は共通です。

事例A：活動時間60分 参加者数は、8人（利用者6人、職員2人）

事例B：活動時間80分 参加者数は、16人（利用者12人、職員4人）

事例C：活動時間60分 参加者数は、12人（利用者8人、職員4人）

(2) 分析の方法

分析は、施設側から許可を得て撮影した活動のVTRの映像・音声をもとに進めました。方法は以下のとおりです。

- ①VTRから利用者・職員の行動や会話を書き起こす。
- ②会話の内容を既往研究で用いられているコミュニケーション分析のカテゴリ（表-1）にあてはめて分類・集計を行う。
- ③分類・集計を行ったものに統計手法を適用し、利用者ごとのコミュニケーションパターンを図示する。

表-1 分析に用いたカテゴリ

利用者	言葉 多	言語の表出が多い利用者（7名）
	言葉 少	言語の表出が少ない利用者（6名）
内容	意見・意志	意志・思考などを言語で伝える
	質問	相手に質問を行う
	応答・指示受容	「うん。」「はい。」 指示に応じた行動
	緊張緩和 自発行動	笑い・あいさつ・冗談 など 自発的な行動（指示や働きかけなしに起こした行動）
方法	言語	言語的方法によって意志や情報を伝達している
	非言語	非言語的方法によって意志や情報を伝達している
活動との関連	関連 有	活動目的に関連した言動 (例：カエデって赤いんだね)
	関連 無	活動目的に関連していない言動 (例：昨日、私、お祭りに行ってきた！)

なお、利用者については3事例への参加者から13名を選び、職員からの情報収集や筆者の森林体験活動を通じた接触経験から、言葉の多い人たち（7名）と言葉の少ない人たち（6名）に分けました。また、分析に用いたカテゴリは、①利用者（言葉 多・言葉 少）、②コミュニケーションの内容（意見・意思、質問、応答・指示受容、緊張緩和、自発行動）、③コミュニケーションの方法（言語、非言語）、④活動との関連（関連有、関連無）としました。

サンプル \ カテゴリ	言葉		内容		
	多い	少ない	緊張緩和	意見	応答・指示受容
A：手のひらの形だ	1	0	0	1	0
B：カエデの葉を差し出す	0	1	0	0	1
C：これ？	1	0	0	1	0
A：はははははは	1	0	1	0	0
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮

図-1 サンプルのカテゴリへのあてはめ（例示）

さらに、分析では書き起こした内容に見られた利用者の発話や行動をサンプルとし、これを各カテゴリにあてはめて分類し（図-1），“0”あるいは“1”の変数を与える統計手法を適用しました。

分析の結果

(1) サンプル数と内訳

3事例から利用者・職員の会話を書き起こしたところ、分析対象として1,536のサンプル（施設利用者による発話・行動）が得られました。サンプルのカテゴリへのあてはめを行っ

た結果を表-2に示します。利用者のカテゴリにおいては、言葉の多い人たちによるものが75.4%でした。また、内容のカテゴリでは意見・意志が41.9%と最多で、次いで、応答・指示受容が22.7%となりました。さらに、方法では言語が81.6%、活動との関連では関連無が51.8%となりました。サンプルにおける各カテゴリの内訳を見ると、各カテゴリともに10%以上を示し、極端に数値の低いものがなかったことから、統計手法を適用しても差し支えがないと判断できました。

(2) 統計手法の適用

サンプルを集計したものに統計手法を適用したところ、利用者のコミュニケーションを評価する指標として、①コミュニケーション手段（用いられているコミュニケーション手段が言語的なものか非言語的なものか）、②活動への関連性（行われているコミュニケーションが森林や活動目的に関連しているか否か）、③活動参加の姿勢（能動的に参加しているか受動的に参加しているか）が見出されました。そこで、これら3つの指標のうち説明力が高い、指標①、指標②で構成する座標軸上に統計処理から得られる各カテゴリの得点を布置したところ図-2の結果が得られました。

これによると、言葉の多い利用者は森林活動において、言語的手段を主体に指導者・職員・他の利用者と意見・意志を伝えたり、質問をしたり、時には、緊張緩和（冗談・笑い等）に係る発話を行っていると思えられます。また、その内容の多くは活動に関連した

ものであり、指導者から提示された活動に係る目的達成に関連するコミュニケーションが主体であると理解できます。一方、言葉の少ない人たちは非言語的手段（身振り・直接的な行動）によるコミュニケーションが主体で、意見・意志を伝える、または、質問を行うなどのコミュニケーションは多くない状況です。また、活動に関連しないコミュニケーションや応答・指示

表-2 サンプルの内訳

カテゴリ		比率 (%)
利用者	言葉 多	75.4
	言葉 少	24.6
内容	意見・意志	41.9
	質問	10.4
	応答・指示受容	22.7
	緊張緩和	2.7
	自発行動	12.0
方法	言語	81.6
	非言語	18.4
活動との関連	関連 有	48.2
	関連 無	51.8

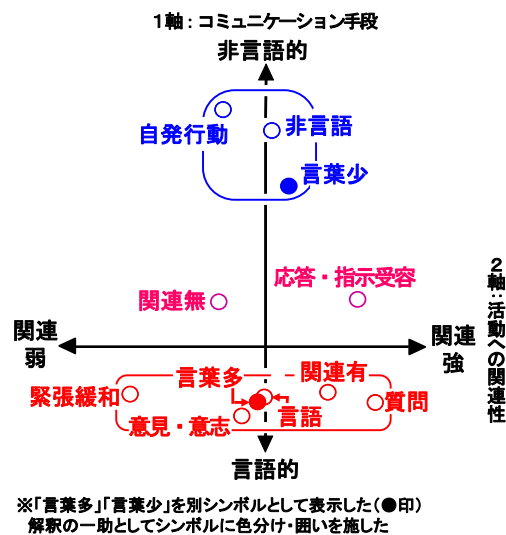


図-2 統計処理の結果

受容は両者の中間に位置しており、言葉の多い・少ないに関わらず、双方の利用者が行っていたと捉えられます。

(3) 言葉の多い人たち・少ない人たちのコミュニケーション

統計手法の適用により得られた施設利用者のコミュニケーションパターンの検討を行いました。ここでは、対象とした13名のうち、抽出されたサンプル数が多かった8名（言葉の多い人:4名、言葉の少ない人:4名）を対象に、指標①、指標②で構成する座標軸上に、各個人のコミュニケーションの状況を布置しました。

図-3に言葉の多い人たちのコミュニケーションパターンを示します。

これを見ると、4人ともに、第3象限、第4象限を主体にサンプルが布置され、言語的手段を主として用い、活動への関連が強い事柄、弱い事柄の双方に関わるコミュニケーションを行っていることが理解できます。

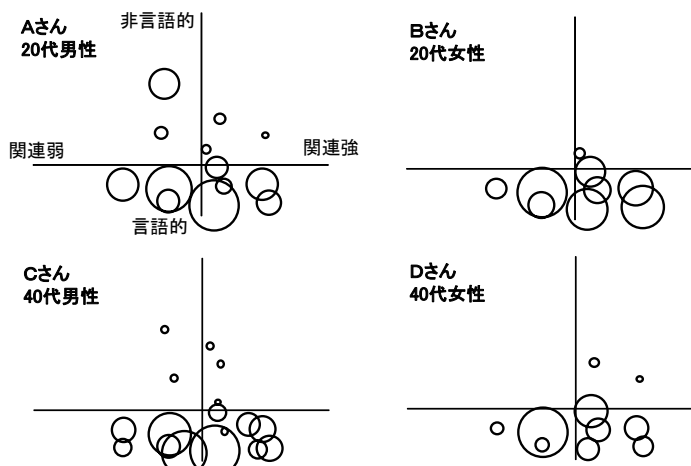


図-3 言葉の多い人たちのコミュニケーション

図-4に言葉の少ない人たちのパターンを示します。

4人の利用者ともに第1象限、第2象限を主体にサンプルが布置され、非言語的手段が主体です。例えば、Fさん、Gさん、Hさんは、第1象限に布置されるサンプルが一定数存在することから、施設職員などから支援を受けてこれを受容する、周囲の人たちからの言葉に対して応答等の単純な反応で応える形で活動に参加をしている様子が伺えます。また、Eさんに関しては活動に関連の薄い行動が主体であり、これを自発的に行っている様子が伺えます。

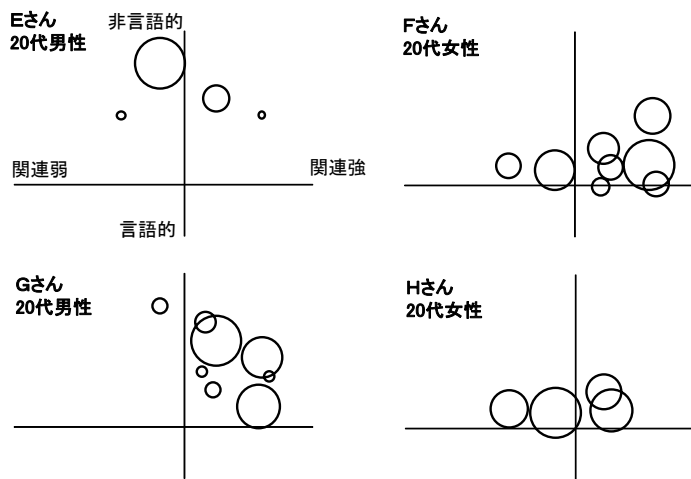


図-4 言葉の少ない人たちのコミュニケーション

考察

今回の分析では以下の点が見出されました。

- ①言葉の多い人たち（A～Dさん）では、頻度や種類に違いは見られるが、活動に関連性のあるコミュニケーションやそれ以外のコミュニケーションの双方が認められ、他者からの働きかけに応じ、自らの考えや意見を述べる様子が伺われた。
- ②言葉の少ない人たち（E～Hさん）は、コミュニケーションが特定のパターンに集中する傾向が認められた。今回の場合では、Fさん、Gさん、Hさんは活動への参加は認められるが、そこで行われるコミュニケーションが単純で非言語的であること、また、Eさんは非言語的で活動に関連性の低いコミュニケーションが主体であることが見出された。

活動は森林に関する知識を得ることに加え、参加を通じた「経験の幅」を広げることも重要です。特に、Eさんの場合は活動に関連の薄い行動が主体であるため、活動に関心を持って活動に参加する場面を少しでも持ってもらうことが指導者側の目的として考えられます。図-4では第2象限に属する活動への関連が低い行動が多く見られるのですが、一方で活動に関与したと捉えられる状況も認められます（図-5）。

そうした場面を具体的にみるために、スタッフや他の利用者からの働きかけとこれに対するEさんの反応の記録を書き出しました（図-6）。Eさんは活動に関連しない行為やコミュニケーションが多いのですが、この場面では、職員から提示されたイチゴの実を食べる場面に参加し、酸っぱさを表し、問いかけに頷いていました。このように、職員や指導者が直接話しかけていること、森林の事物を提示していること、食べる・採取する等の直接的な経験を行っていること等、各施設利用者の興味関心を押し量り、働きかけを行うことが、利用者の森林活動への参加拡充につながるものと考えられます。

森林での活動は多様なコミュニケーションにより展開されますが、利用者とともに活動を行う場合には言語的コミュニケーションが得意な人たちのほかに非言語的コミュニケーションが

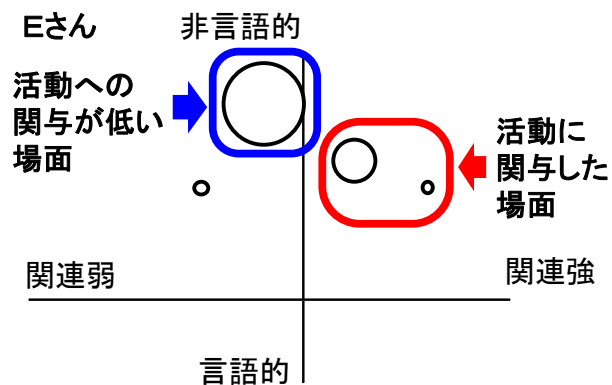


図-5 Eさんのコミュニケーション

C	食べたい人	イチゴ
S2	食べてみて	
C	食べたい人	イチゴ (言いながらイチゴをEさんに渡す)
E	イチゴを受け取り食べる	
筆者	うまいですか?	
E	食べた後に頭を前後に振る動作 (酸っぱそうな表情)	
S2	あんまりおいしくない?	
S1	うーん、ちょっとわからないっていう表情?	
C, E:利用者 S1, S2:職員		

図-6 Eさんとのやりとり

主体的手段である人たちの存在を忘れることなく、両者への接し方を考慮に入れた活動展開が求められます。また、森林の素材を介した直接的な働きかけを継続することにより、利用者との人間関係が醸成され、円滑な活動の進行が可能になると考えられます。

今回の結果は3事例を対象としたものであり、結果の普遍化にはさらなる分析が必要と考えます。例えば、活動中に表される言葉の内容は利用者の状況だけではなく、活動テーマや指導者側の接し方に影響されることも想定されます。また、森林での体験活動への参加経験が増えることにより、利用者のコミュニケーションがいかに変容するかといった追跡調査等も課題として考えられることから、今後も調査事例を増やし、こうした点について検討を進めていきたいと考えています。

(道南支場)